Japón Argentina

会報

No. 30
20 de Octubre, 2000

話題

アルゼンチン資本
日本鉄鋼業界へ 1
木島駐ア大使が語る 3
江戸あやつり人形 4
ホームステイで
スペイン語研修 5
情報誌を作る
アルベルト松本 6
ボルヘス会誕生 9
フォルクローレと
ペヘレイのツアー 11
タンゴの穴場 11
本誌タイトル募集 11

アルゼンチン資本 日本の鉄鋼業界に進出

野村秀治

アルゼンチンの鉄鋼企業が日本の鉄鋼会社と合弁し、事実上傘下におさめ、経営をコントロールしている－と言えば大方の日本人は首をかしげるに違いない。

しかしその会社はすでに発足し、川崎でアルゼンチン人経営者の指揮のもとに、グローバル戦略を展開している。その背景と実態を追ってみる。

―つまり日本の鉄鋼会社の世界戦略の誤りが、このような結果になったのでは？

サンマルティン会長

「いや、そうではない。日本の鉄鋼会社の技術力は素晴らしいもので、われわれも必要としている。彼らは尊敬すべきパートナーだ」

新会社の会長、カルロス・サンマルティンさんは、ホテル横のお堀端に遊ぶ白鳥を眺めながら答えた。

アルゼンチンの鉄鋼大手テチント・グループのパイプ製造部門である「シデルカ」が51%、NKK（日本鋼管）が49%の資本で発足したシームレスパイプ製造会社"NKK-t"は、さる8月から川崎で稼動し始めた。日本人従業員1500人のトップに立つアルゼンチン人経営者はわずか5名。

成長著しいアジアにおける油田開発用のシームレスパイプ製造の拠点として、旧NKK工場はいまや往年の活気を取り戻そうとしている。

つい最近まで世界に冠たる鉄鋼メーカーであり、油田用パイプの最大供給元であった日本の鉄鋼がなぜ、アルゼンチンの傘下に入らざるをえなくなったのか。それは独り鉄鋼の問題ではなく、「モノ造り」をつづけ貿易立国でしか

生存できない日本にとっての深刻な課題といえよう。

規制緩和をすすめ民営化を徹底したアルゼンチンの企業は、いちはやく世界規模でのマーケット戦略を展開した。パイプメーカーのシデルカは、1993年メキシコ、1996年イタリアの鉄鋼メーカーを傘下におさめシームレスパイプのマーケットを取り込んでいった。

まず油田掘削の初期、中期の段階で使用されるスタンダードパイプ（casing）の製造で国際競争力をつけ、大半のマーケットを手中に収めて、最終段階に使用される高品質のクローム鋼パイプ（tubing）に迫った。

量的に圧倒的な強さをもつ多国籍企業が最後の砦である高品質のパイプ部門を傘下に収めるのは時間の問題であった。需要家のオイルメジャーは、大量のcasing pipeと高品質だが少量のtubing pipeを個別に購入するよりも、すべてをpackageでかつ中・長期的に安定的に、そして安く購入することを選好し、マーケットは自からシデルカの手中に落ちていったのだ。

世界のマーケット戦略の明暗がここにあり、わが国の他産業にとっても示唆的と言わざるを得ない。中国の諺に「刻舟の剣」というのがある。

むかし、ある男が船で揚子江を渡っていた。一ふりの剣を抱えていた男が、誤って剣を水中に落とした。あわてた男は、いきなり腰の小刀を抜いて剣が落ちた場所のふなばたに傷をつけて目印とし、向こう岸について目印の所から水中に飛び込んで剣を探した。

いま日本国内のマーケットに固執し、グローバルなマーケット動向を見失い国際競争力を失っている産業は鉄鋼だけではない。

サンマルティン会長とのインタビューに話をもどそう。

— NKKとの合弁の話はいつ頃から？

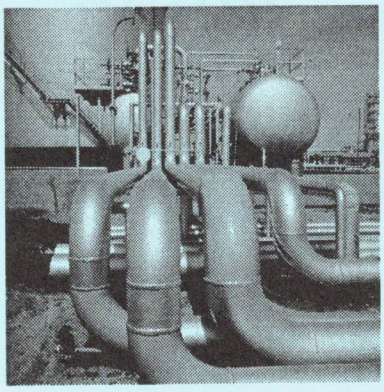
「3/4年前から密かに交渉を始めた」

— NKKとの合弁のメリットは？

「NKKの高品質のパイプは、シデルカにとっても貴重なもので、双方が補完してロシアや中国に充分対抗できる強力なメーカーになれることだ。これはNKKにとってもメリットだ」

— シデルカの国際競争力の背景は？

「4つある。まず労賃が安いこと、アルゼンチンの労賃は日本の3分の1だ。メキシコはさらに安い。第2に使用するエネルギーコストが安い。第3は技術水準は効率よくupdatedで



きる。そして最後は工場のロケーションが鉄鉱石などの原料ソースに近く、輸送コストが安い点だ」

— 部下である日本人の働きぶりは？

「大変満足している。NKKはいい人材を提供してくれて感謝している。言葉の問題、異文化間のちょっとした問題はあるが、時間とともに解決できる。アルゼンチンはもともと多民族国家であり、われわれは多国籍企業だから問題解決には慣れている」

— 世界のパイプ・マーケットのキーワードは？

「Global purchase vs. Global production だ。この潮流を見誤ると生き残れない」

わが国の伝統的基幹産業とは、一味違った経営哲学をほのめかしていた。

（のむら　しゅうじ、
当協会専務理事）

木島輝夫駐アルゼンチン大使が語る

アルゼンチンはどう動くのか

アルゼンチン経済について

■ デラルア新大統領は、財政立て直しによってまずアルゼンチンに対する国際的な信頼を回復させたいと思っている。今は、利息が高くて仕方がない。信頼が回復すれば外国からの借り入れの際の利息も下がるし、投資も増えると読んでいる。財政立て直しのためには、緊縮財政を敷いた。所得税を上げ、付加価値税の範囲を拡大し増税をはかった。年金改革をし、公務員の給与をカットした。当然国民の生活は苦しくなっている。しかし大統領は、しばらくは我慢しようじゃないかと訴えている。この政策は、IMFの支持を受けている。アルゼンチン人もかわったのではないか。従来のままではいけないと思い出したのではないか。

■ メネム前大統領の経済改革は、全体的にはよいことをしたが、民営化による合理化で職を失う人たちが出た。アルゼンチンの貧富の差が拡大し、中産階級の幅が狭くなった。デラルア大統領も貧富の差の拡大を認めており、何とかしたいと言っている。

政治について

■ メネム政権末期は、汚職がひどいということも手伝い、調査機関による支持率調査は17%だった。デラルアの支持率は69%に達している。デラルアは、紳士で人柄がよく、誠実だと有識層を中心に人気がよい。今現在はアルゼンチンの政治は全体として安定していると言える。

■ ペロニスタは上院で過半数を占めているが、国民は、ペロニスタが党利党略に走っているとして支持していない。労働組合が6月に24時間ゼネストを打った。しかし、国民の反感を買っただけで、指導者のモジャーノ氏は国民の支持を失った。

外交について

■ アルゼンチンの対米関係はよい。メネム時代はアルゼンチンと米国の蜜月時代といわれた。デラアルアはこれを継続しようとしている。欧州とは長い間によい関係ができている。最近中国との関係はすごい。大型の代表団がアルゼンチンを訪れて、政府高官がアルゼンチンの地方へも視察に出かけて行く。中国勢は、アルゼンチンで土地を買いつつあるという話だ。一方で中国の軽工業品、たとえばタイヤとか繊維製品とかがアルゼンチン市場へ入ってきている。

牛肉の輸出について

■ アルゼンチンは牛肉を非常に日本に売りたがっている。アルゼンチン国内の牛肉消費が減少して牛肉生産も減少気味とか言う人がいるが、実情は、価格を見ながら生産者が調節をしているのであって、需要が増えればどんどん生産を増やすだろう。国際機関によってアルゼンチンが口蹄疫清浄国と認知されたので、日本としては、牛肉輸入を制限する理由がなくなった。これから専門家を派遣して日本の目から見ても口蹄疫がなくなったことを確認することになろう。あとは、ビジネスの問題になる。今、日本にはアメリカと豪州から牛肉が入っている。一般論としては、米国と豪州の牛は、トウモロコシを飼料にするフィードロット（人工飼育）だし、アルゼンチンはGrass Fed（牧草飼育）で違うから日本市場での住み分けはできるのではないか。いずれにせよ、日本の消費者の趣向にあったものであることが大切だ。

日ア関係について

■ アルゼンチンの有識者は、日本が目覚しい経済発展を遂げたことをよく知っており、技術力のすごさもよく知っている。しかし、国際的には発言力がなく政治力はないと認識しており、日本の総合力は弱いと見ている。今のところ日本はアルゼンチンに依存する分が少ないが、アルゼンチンは日本に足りない鉱物資源と食料の両方を持っている。長い目で両国の経済関係を育成して行くのが大事なのではないか。

（本記事は、木島大使が7月に一時帰国された際東京でインタビューしてまとめたもの。
きき手　野村秀治　河崎 勲）

江戸糸あやつり人形
ブエノスアイレスで喝采

日亜学院での公演

「江戸時代から伝わる大道芸をアルゼンチンで公演して、日本文化を広めたい」との座長、上条充さんの熱烈な要請に応えて、6月22／24日に国際交流基金の援助のもと、当協会の斡旋でブエノスアイレス初公演が成功裡に実現した。

当初、現地受け入れ団体の引き受け手が難航し、日系2世／3世のグループである「セントロ日系」に落ち着いたが、一部に不安視する向きもあった。しかし結果は見事な手配で関係者一同は大満足。さらにアルゼンチンの「あやつり人形博物館」で現地の人形遣いと歴史的な文化交流まで実現させるほどの腕前を見せた。

あやつり人形がこのたびの文化交流を通じて、若き日系子女たちのひたむきな憧憬と厚き友情を浮き彫りにしてくれた。それは予期せざる収穫であった。

上条充

私は、江戸時代から伝わる日本の糸あやつり人形を遣っています。　この6月、ブエノスアイレスにて公演してきました。僅か2泊3日でしたが、日亜学院と日本公園で公演、またアルゼンチン人形劇博物館では現地で活躍の人形劇人30名ほどと交流があり、とても喜ばれました。しかしベルグラーノ広場での大道芸は雨で中止となり残念なことでした。

日程の調整から進行までお世話くださったのは、セントロ日系の三世、四世の若い人達でした。彼らは、自分達の体の仲を流れる日本人の血と、生まれ育ったアルゼンチン人としてのアイデンティティーを融合する中から、新たな文化を創出しようと真剣に取り組んでいます。彼らのためにも、また日本とアルゼンチンとの更なる友好のためにも日本文化をどんどん紹介して頂きたいと思います。

最後に、日本アルゼンチン協会の野村秀治氏には一廉ならぬお力添えを頂きました。この紙面をお借りして御礼申し上げます。

（かみじょう　みつる）

小木曽モニカ

日亜学院では子供たちがどんな反応を示すか心配でした。しかし上条さんの集中したエネルギーで操る微妙な人形の動きに6才の子供たちまで熱心に見入っていました。

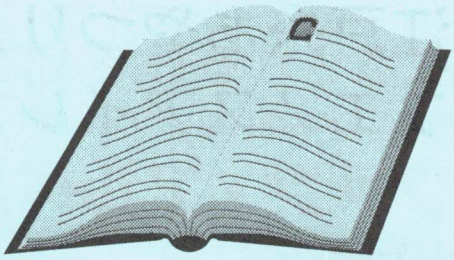
亜日文化協会（茶亭）での公演は、初めて見る日本のあやつり人形に、木島大使をはじめ満員の大人も子供も大変楽しみました。上条さんの説明は楽しみをさらに深めてくれましたが，それぞれの人形の役柄の絶妙な変化に驚きました。

土曜日にはあやつり人形博物館を訪れ、アルゼンチン随一の人形遣いであるサラ・ビアンキ館長と街中のマリオネットやあやつり人形遣いが集合して交流を深めました。午後はベルグラーノ公園で大道芸を見せる計画でしたが、あいにくの大雨で中止したのは残念でした。

このたびの公演は多くの教訓を残してくれました。日本の方ももっとアルゼンチンの文化を幅広く知って貰いたいし、アルゼンチン人も日本の奥深い文化に触れて欲しい。私たち，日系人はこれからも日亜両国の文化交流の架け橋になって行きたいと存じております。

（セントロ日系世話人代表）

ホームステイで スペイン語研修



小川りえ

真夏の日本を出てやっと着いたブエノスアイレスには寒波が襲来していて、真冬の世界でした。2回目のブエノスアイレス訪問の目的は、習い始めて3年にもなるのに一向に上達しないスペイン語の聴く力を向上させることにありました。日本を発つ前、学校探しに少し苦労しましたが、結局インターネットで2週間40時間の集中コースを英語で申し込むことができ、この学校が最初のホテルとその後のホームステイ先を見つけてくれました。

学校はセントロにあります。施設もよくカフェテリアにはいつもコーヒーとマテ茶が用意してあります。学校のまわりに何十とレストランテやらカフェやらがあるので食事に困ることはありませんでした。アルゼンチンのパンがおいしいので、毎日いろいろなサンドイッチを楽しみました。

クラスは中級の3クラスのうちの一番下だったので、楽だと高をくくっていたら、後の2人の生徒のレベルがかなり高く、ディスカッションや作文では苦労しました。2週目に入ってからは新聞（クラリン）の記事を使って授業するようになりましたが、指定される記事が日によっては2ページにわたることもあり、毎日カフェで何時間もねばって単語を引きました。でも何時間かけて予習をしてもその部分の実際の授業は20分ぐらいであっという間に終わってしまうのです。2ページの経済記事を読んで自分の意見を1枚のペーパーにまとめてくるようにという宿題が出たときはさすがに悩みに悩み、「あしたは先生に「できませんでした」と打ち明けよう」と決心していましたら、他の2人の生徒もできてなくて、ほっとしたことがありました。

先生（右）と友人達と

2週目にホテルを出て滞在したホームステイのお宅はアンヘル・ガジャルドというところにあるマンションでした。学校はスブテ〔地下鉄〕で5つ先の駅のところにあります。ブエノスアイレスでも満員電車があるのに驚きました。バスが乗り口のステップに人を乗せたままドアを開けっ放しで猛スピードで走るのにもびっくりしました。

家主のドラさんは、日本人のホームステイは初めてだといい、黒沢明の映画が好きだとか、藤沢嵐子のタンゴはアルゼンチンの歌手よりうまいとか言っていました。日本人はお米が好きでしょうからと言って、米を使ったサラダや米の入ったスープを作ってくれました。

タンゴではなく単語引きに忙しい毎日でしたが、スブテヤバスで動き回ることができ、コリエンテス通りの何十もの本屋さん巡りもできました。少しは新聞も読めるようになり、ブエノスアイレス訛りや、vos の活用も少し分かりました。普通の観光とは違った滞在ができたことをうれしく思っています。

（おがわ　りえ、当協会員）

インタビュー　<この人>（6）

尊敬される日系人になって欲しい

同朋のための情報誌を作り続ける

ファン・アルベルト松本さん

マルビナス（フォークランド）戦争で悲惨な塹壕生活と海空からの猛攻撃に耐えて生還した日系二世である。大学生だからと首都の待機兵グループに残されていたが、前線行きになった兵士が、出産したばかりの妻は生活にも困窮していると上官に訴えているのを聞いて、荷物と銃を受け取って敢然と身代わり前線行きを志願した剛毅な青年だった。

来日10年。ビジネスの通訳と翻訳が主な仕事だが、東京・横浜の地裁から依頼される刑事訴訟の法廷通訳歴がもう8年になる。最近は民事訴訟も増えて、「どろどろした離婚調停の話が終わるともうへとへとになります」。大した収入になる訳でもないし話がややこしいから他の通訳の人たちは敬遠してこの人にまわってくる。それにしてもこういう場に出てくるラテンアメリカの日系人がどうしてもっと日本社会のしきたりを尊重しないのかというのが、アルベルト・松本さんの情報誌「武蔵」発行の動機だ。

「日本の役所はこうしろと言うけれど、そうしなかったら que pasa ?（どうなるの）と日系人が私のところに逆の発想で訊いてくるんです。小さい時から国や制度をあまり信用しないように育ってきたからなんでしょうね」

「日本の社会は甘くないから、そんなことを言っていると結局あなたが損をするよ」と、「武蔵」はかんでふくめるように日本での生活についてのアドバイスを与える。「子供が生れたら日本の区役所に届けるのはもちろんだが、同時に領事館にも出生届けを出して入国管理局でビザを申請しておかないとその子は日本で滞在できないしアルゼンチン国籍もなくなりますよ」と。執筆から編集まで一人でこなし、スペイン語4ページと日本語2ページで毎月2500部刷っている。あっという間になくなる。安い購読料とささやかな広告料で何とかしのいでいる。

在住の神奈川県委嘱委員に加わりこれもボランティアで、在日外国人の労働条件、教育、医療などについて2年がかりで提言をまとめあげた。今は学識経験者と一緒になって県の住宅政策懇話会の委員に引っ張り出されている。あまりの忙しさに日本生れの奥さんがはらはらしている。

ブエノスアイレスの名門サルバドル大学で国際関係論を専攻、来日して筑波大学、横浜国立大学両大学院で学び、経済関係法修士を取得。ブエノスアイレスの郊外に移住した日本人の両親から厳しく仕込まれた日本語は、二世とは気がつかない完璧な教養高い日本語。にこやかで落ち着いた話しぶりだけではでとてもこの活発な社会奉仕活動が浮かんでこない。

「アルゼンチンでは日本人がこつこつとアルゼンチン社会に貢献してきたから尊敬されているのです。日本にいるラテンアメリカの人たちも日本のことをもっと学んで日本社会で尊敬される存在になって欲しい」「日本も閉鎖的な部分はありますが、所得配分とか、ライフスタイルとか、将来展望とかラテンアメリカにはない参考になるものがたくさんあります」「ただ、この情報誌はいつまでも続ける気はありません。ある程度予定したテーマが完結すれば区切りにしたい。次のことをやります」

インタビュー　河崎　勲
（当協会理事、ダンコムジャパン代表取締役）

最新アルゼンチン情勢

～政治・経済の主なできごと～

小林晋一郎

デ・ラ・ルア政権は国内景気回復の遅れ、上院収賄疑惑、口蹄疫再発という困難に直面、近く大幅な内閣改造は不可避であろう。経済成長率はラテンアメリカ諸国中、最下位グループ。

「上院スキャンダル」

今年4月に上院を可決した労働法の改正を巡り、賛成票を確保する為に野党ペロン党（上院での最大政党）の上院議員に対する収賄が発覚、労働大臣を巻き込んだ大スキャンダルに発展、議会審議は進まず政局空白の状態が続いている。

「口蹄疫発生」

北部（フォルモサ州、エントレリオ州、コリエンテス州）で口蹄疫が再発、損害額は月間4000万ドルになると見込まれている。〔8ページに関連記事〕

「大統領、中国などを歴訪」

デ・ラ・ルア大統領は9月、メキシコ、ニューヨーク（国連総会）、カナダと中国の4ヵ国を訪問した。中国には50人のアルゼンチン民間企業家が同行した。

「IMF目標修正」

9月、今年3月にIMFと合意した72億ドルのスタンドバイクレジットの条件修正を求める趣意書をIMFに提出、経済の回復が遅く弱い内需から今年の経済成長率を2%とした上で、財政赤字目標を47億ドルから53億ドルに増額することでIMFの合意を取り付けた。財政均衡法では財政赤字額を2000年55億2000万ドル以内、2001年42億7000万ドル以内、2002年25億6000万ドル以内とし2003年財政収支均衡と規定されているが、財政均衡達成が先送りされる懸念が大きい。

「2001年政府予算案」

2001年政府予算案が9月15日、下院に提出された。財政赤字は44億ドル、中銀の黒字分を加え40－41億ドルとしている。政府は2000年に実現できなかった削減策を中心に20億ドル以上の支出削減を盛り込んだと説明している。

「経済成長率見通し下方修正」

マチネア経済大臣は2000年経済成長率予想を2.5%から2.0%へ下方修正を発表した。年初の政府見通しは3.5%であった。

「通信の完全自由化せまる」

通信の本格的自由化が11月8日から始まるが、ライセンス、相互接続、過疎地域対策基金、管理監督方法・範囲などを定めた大統領令が9月、交付された。通信業者は固定電話からインターネット、携帯電話、データ通信まで全てのサービスを提供できる。他社の回線網を使用する場合に新規業者が支払う互接続料金は現行の1分2.35センタボから1.1センタボに引下げられる。政府は18ヵ月以内に40億ドル以上の投資と1万人の雇用創出効果を見込んでいる。

「国産品購入運動」

民間経済人のティサドが新工業庁次官に9月、就任。基本政策として国産品購入運動を展開し、外国製品と品質基準で入札を行った上で国産品購入を義務づけたいとしている。ただ、政府内部には旧来の保護主義政策に戻るとの批判がある。

「鶏肉問題」

ブラジルとの通商摩擦の一つである鶏肉について、マチネア経済大臣は法令574/2000に署名、ブラジル産鶏肉輸入に対してアンチダンピング課税を発効する権利を確保した。

「雇用環境悪化」

5月に全国都市部の失業率は前年同月比0.9%増加し、15.4%となった。

「パソコン普及策」

政府は5月、中低所得層でのパソコンの普及促進のため、国立商業銀行ナシオン銀行を通じて低利融資計画（同行の個人貸出金利年率23%を下回る年率15%）を発表、7月関係機関が調印した。850ペソ以下のパソコンを対象とし、100万台の普及を見込む。現在の40万人のネット人口を4年後には400万人に拡大することを目指している。

（こばやし　しんいちろう、当協会編集委員）

アルゼンチン北部で口蹄疫発生

在日アルゼンチン大使館によると、口蹄疫清浄国に認定されたばかりのアルゼンチンで口蹄疫が発見された。場所はパラグアイと国境を接する北部フォルモサ州で、SENASA（農牧食品衛生機構）は直ちにウイルスを持つ牛と感染したと見られる牛3500頭を衛生処分すると共に、北部から他の地域への牛の輸送を禁止し、全土で綿密な追跡観察を行った。8月の発生以来1か月後現在で新たな発生は報告されていない。

SENASAは、検出されたウイルスが過去アルゼンチンで見られたことのない菌であることなどから、国外から不法なルートで入ってきた牛がウイルスを持ち込んだと見ている。

アルゼンチンは、今年5月に国際機関から口蹄疫清浄国に認定され、牛肉の対外輸出に力を入れ出したばかりである。アメリカ政府はアルゼンチン産食肉の輸入を一時的に中止した。日本へのアルゼンチン牛肉輸出はこれから政府間の話し合いという段階だが、今回の口蹄疫発見は日ア間の話し合いの進展に影響を与えるかも知れない。

一方、9月末現地を視察したOIE（国際獣疫事務局）調査団は、アルゼンチンの口蹄疫清浄化認定を取り消す必要のないことと国境地域の協力関係の強化を勧告した。

（河崎）

随想 私とアルゼンチン

薄井康夫

Pampaの大自然に接して

アルゼンチンの広い国土の中心部に拡がるパンパ。この天与の大広野を東西に貫通する道路では自分の車以外には出会う車とて稀で、殆んど気使う必要もなく、1000キロ乃至1500キロの道を自分達の気侭な運転で走破することができた。この想い出は今なお忘れ難い印象を私に与えた。

その道中のこと、車窓から延々と続くgirasol（ひまわり）の豊かな畑地を眺めては

「ヒラソルの畑を車窓にパンパ行く」

と心中に吟じた。又、広いLagoon（沼地）を含めて柵もなく拡がりをみせている大牧場の中で遭遇した数知れぬ牧牛の周辺に、白い野鳥が悠然と草をついばむ風景も亦私の眼底に残っている。

「白雲と草喰む群牛 夏の昼」

私はこの項を執筆するにあたり、W. H. Hudsonの「Far Away and Long Ago」（ロンドン出版）の該当ページを開いてみた。彼は幼少の頃、パンパの近くで育ち後年駐アルゼンチン英国大使となった仁（ひと）であるが、その6才の幼な心に映った驚嘆は、既に50才に達していた私が肌身に感じた思いと殆んど同一のものであった。人智は進んでも人間は矢張り大自然の中の一生物に過ぎないのであろう。William H. Hudsonの名はパンパと切り離せない想いがしている。

港町Boca（ボカ）をめぐって

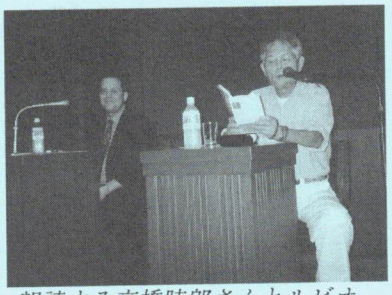
Buenos Aires郊外に近いこの港町では、常時多数の帆船が積荷や揚荷のため入港していたのを覚えている。港にごく近く、タンゴの曲で有名になった例のCaminito（カミニート）がある。この小路あたりに居を構えていた労働者達は、昼間の労働を終えたあと、近くのタンゴ劇場に行き、人生を朗らかに豊かな気持ちで過ごしたものと推察された。このBocaには美術館があって、港湾労働者の労働振りの逞しさを描いた絵画が沢山集められていた。その港美術の頂点にあったのが今は亡き世界的画家Benito Quinquela Martin（キンケラ・マルティン）であった。その筆致の生き生きとした躍動は、人に迫るものがあった。その著名な巨匠に私は在勤当時、一度だけ彼のアトリエで面接する機会を得たことがあった。その時記念のためにと戴いた画集「Belleza de la Boca」の写真版には“Recuerdo de Quinquela Martin a Yasuo Usui Octubre 1968”とサインが署名されており、私にとって又とない記念の品ともなった。

（うすい・やすお、商船三井主席として1967年から1970年までブエノスに在勤。のち国際コンテナ輸送株式会社社長。当協会前専務理事）

迷宮の世界に迫る

東京にボルヘス会が誕生

河崎　勲



朗読する高橋睦郎さんとルビオ・レイナさん」

芥川賞作家の川上弘美さんはボルヘスをこう語る。「ボルヘスは中身が濃密で読む者は拒絶されるところがある。学生のころはボルヘスは難しかった。分かりにくいものに取り組んでいることがうれしいというところがあった。その後自分も経験を積んだし、ボルヘス文学自体も変わったし、変わったあとの作品は分かりやすい。他の作家と違ってボルヘスの作品は一つ一つにボルヘスの持つもの全体が凝縮されており、どれをとってみてもボルヘスの世界に迫ることができる。それぞれの人がそれぞれに楽しめる作家だと思う」

ボルヘスを愛する人は多い。ある人は彼の博覧強記に驚き、ある人は現実と夢の交錯に酔い、ある人は論理の迷路に迷い込んで途方に暮れる。「ボルヘスは誰もが自分だけのものにしておきたいと思う作家です。しかし彼の文学は知識の集大成で、一対一では太刀打ちできないのです。みんなが知識を持ち寄ってボルヘスの世界に入り込む喜びを分かち合うことが必要です」と語るのは野谷文昭（のや・ふみあき）さん。野谷さんはラテンアメリカ文学研究者で立教大学教授。ボルヘスとは親しい間柄であった。野谷さん達のグループは、去年ボルヘス生誕100周年を記念してボルヘス未亡人の日系二世マリア・コダマさんを日本に招待し、ボルヘスシンポジウムや展示会等を開いた。このグループが核となって今回ボルヘス会を作った。

野谷ボルヘス会長

9月30日立教大学で開かれた第1回大会は、前述川上弘美さんの講演「ボルヘスと私」、タンゴ歌手香坂優さんの歌、詩人高橋睦郎さんと駐日アルゼンチン総領事ルビオ・レイナさんの掛け合いによるボルヘスの詩の原語と日本語訳の朗読などがあり楽しい集いになった。香坂さんの歌ったタンゴ「ハシント・チクラーナ」は、いさかいで刺されてあっけなく死んだマッチョ男を友人が酒場で回想するボルヘスの詩にアストラ・ピアソラが曲をつけたもの。本邦初演。

ボルヘス会は文学者・研究者だけの集いではなく、異質な顔ぶれの緩やかなものにしたいと野谷さんたちは考えている。異質の顔ぶれが揃ってこそボルヘスの全体像により迫ることができるだろうし、世界の文学をみんなで共有することを提唱していたボルヘスの意志にも沿うからだという。充実した機関誌を作り、随時講演会や勉強会を開きたいという。

機関誌「迷宮」創刊号から、谷川渥さんの卓論をあえてやさしい言葉に置き換えてご紹介する。「ボルヘスを読まない人は幸せである。そういう人はバベルの図書館にも迷宮にもさまよい込むことなく、夢、球体、地図に心わずらわされることもなく、自分だけの生に満足できるからだ。自己の同一性を危うくする覚悟を持ち自分が自分であることを疑える人だけがボルヘスの“迷宮”に入ることができる」

（かわさき　いさお、当協会理事）

ボルヘス会連絡先
立教大学　野谷研究室
FAX 03-3985-0279
Email:
borgiana1899@hotmail.com

アルゼンチン日本人移民史編集計画進む

アルゼンチンに足跡を残してきた日本人移住者のまとまった歴史を作りたいと在亜日系連合会（FANA）が移民史編纂委員会を組織したが（当会報28号既報）、委員会は熱心な会合を重ねこの事業の大綱をまとめた。

日本人移住者の記録は、これまでにも各地域あるいは各団体毎にいくつか編纂発行されているが、今回のものは、アルゼンチン全体を対象にした総括的な移住史にしたいという。いわば決定版作りである。

一色田眸さんを委員長とする編纂委員会がこれまでに議論した結果はこうだ。

○ 戦前編と戦後編に分けて戦後は日ア修交100周年の1998年までとする。
○ A4版で日本語版500ページ、スペイン語版500ページとする。
○ セットで3,000部を発行する。
○ 事業予算は25万2000ドルとする。
○ 2002年4月完成を目指す

議論されている編集内容は、移住草分け時代、日露戦争当時の軍艦譲渡をめぐる裏面史、第二次大戦中の日系人の苦難，花の栽培、次第に社会的に認められる日本人、二世大使の誕生など100年の移住の歴史の一つ一つを網羅しており、学問的にも貴重な資料になると思われる。

一色田委員長らは、資金集めに頭を悩ましているが、まずは自助努力をしたいと、アルゼンチンの日系人が100ペソ（1万円）の前売り協力券を購入する方式を決めた。

（らぷらた報知紙より）

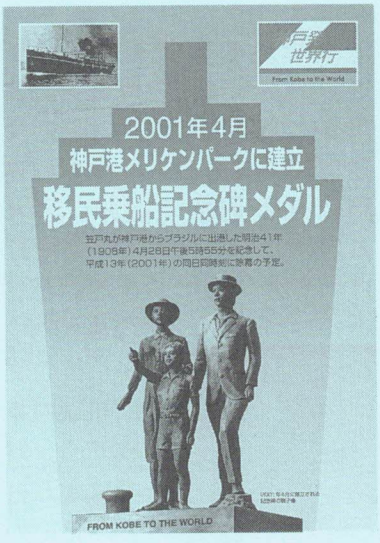
アルゼンチン直送の「らぷらた報知」が読めます

当協会と提携関係にあるブエノスアイレスの日本語紙「らぷらた報知」が当協会オフィスに定期的に届いています。現地の最新情報をお知りになりたい方はどうぞ当協会オフィスでゆっくりご覧下さい。

神戸に移民乗船記念碑の計画

神戸港のメリケン波止場に移民乗船記念碑が建設される。明年2001年4月28日午後5時55分に除幕式を執り行う計画で、神戸市国際部が中心となって関係先にキャンペーンを展開している。この時刻は明治41（1908）年に781名の移民を乗せて“笠戸丸”がブラジルにむけて神戸港を出帆したときだ。

史実によればこの移民の中から約150名がブラジルからアルゼンチンにむけて再移住したという。当協会もこの計画に協力して、かつての移住者の壮挙を賛える事業に参画してゆきたい。

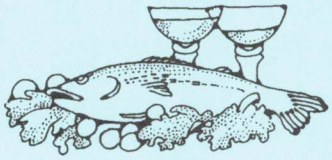


フォルクローレ舞踊団とともにペヘレイ・ツアーを

すでに会報で予告したとおり、きたる10月21日（土）に埼玉県安田ペヘレイ養殖場で例年通りのペヘレイ見学、豪華ランチョン（ペヘレイの天婦羅と寿司、本格アサードとアルゼンチンワイン）を実施します。

ことしは来日中のアルゼンチンフォルクローレ舞踊団一行を迎えて、公演を鑑賞し、ともに食事を楽しみながら、歓談したあと、手をつないで踊ろうという新企画をたてました。

これは当協会員宮下美和子さんの格別の提供によるものです。



同封のチラシをご覧になって、多くの友人をお誘いのうえ，多数お申し込みください。

穴場で聞く本物のタンゴ

とっておきの話

マルセロ・ビダレス（M. Vidales）さんは、アルゼンチンで最も伝統ある新聞、ラ・プレンサ（La Prensa）の時事・文化担当副編集長。先般フォーリン・プレスセンターの招きで来日中に協会幹部とのインタビューで、耳よりなタンゴの情報をくれた。

「タンゴ好きの日本人がブエノスでは、みんな外人むけ、観光客用のスポットでしかタンゴの唄や踊りを鑑賞していない」

確かに「セニョール・タンゴ」「ビエホ・アルマセン」「ミケランヘロ」などでは、劇場用のタンゴは見られるが、本当のタンゴではない、と主張。ブエノスで真のタンゴを聞き、その魂に触れて見たい人は、是非つぎのスポットを訪れるのを薦めると。

● “NINO BIEN”
(女主人 Gabriela Artaza)
Humberto piso 1, 1462
Tel.4901-4756
毎週木曜日よる
（12時頃から）

● “LO DEL CHINO”
Beazley y Amancio Alcorta
(Pompeya)
毎週金・土曜日のよる

（影の声–スペイン語を話さないと融け込めないのでは？
別の声– 協会のスペイン語教室で10ヶ月レッスンをとれば大丈夫）

（野村）

本誌のタイトルを募集します。

「会報」なんてちょっと古い？もう少し魅力的なものに変えましょう。
フレッシュでみんなが思わず手に取って見たくなる、そんなタイトルを考えて下さい。
現在のスタイル、レイアウトにはこだわらないで。
次号2001年1月発行号から使いたいのです。FAXかEメールで送って下さい。
編集委員会で選考し決定します。採用決定のタイトルを考えて下さった方には、抽選で1名にアルゼンチンワイン6本を贈呈します。締め切りは11月30日です。

送り先　日本アルゼンチン協会
FAX 03-3595-3932
Email:
kawasaki@tkb.att.ne.jp

図書を寄贈して頂きました

○「アルゼンチンの歴史」
藤本芳男当協会副会長より
○「アルゼンチンコルドバ州日本人百十年史」（1997）
○「アルゼンチンのうちなーちゅ80年史」（1994）
ブエノス日亜学院真木理事長より

協会オフィスにあります。
ご利用下さい。

催し物

【☞　】は当協会員特別割引

■アルゼンチン・フォルクローレ舞踊団

10月22日（日）龍ヶ崎芸術祭
龍ヶ崎市民ホール

■ポリー・フェルマン

前駐日アルゼンチン大使夫人（ピアニスト）のリサイタル
10月26日（木）
松本市音楽文化ホール（ハーモニーホール）
問合せ：長野エフエム放送
Tel. 0263-33-4400
10月30日（月）
横浜みなとみらい小ホール
問合せ：民音 Tel. 5362-3410

■エドゥアルド・イサーク ギター・リサイタル

11月15日(水) 19:00
東京　紀尾井ホール
S 6500円　A 5500円
☞当協会員は、10%割引
問合せ：Tel. 3470-2727
ソティエ音楽工房

■小原みなみ15周年記念チャリティ・タンゴ・コンサート

視覚障害者30人を招待するチャリティー
11月16日（木）19：00
横浜市民文化会館 関内大ホール
歌：小原みなみ
演奏：ホルヘ・ドラゴーネ楽団
S 7,000円　A 5,000円
☞当協会員はS席500円割引
問合せ：オフィス小原
Tel. 045-712-0097

■ブルーノ・ゲルバー

11月17日（金）19：00
NHK交響楽団との共演
11月18日（土）14：00
NHK交響楽団との共演
曲目：シューマン　ピアノ協奏曲短調
両日ともNHKホール
問合せ：N響
Tel. 5793-8111
http://www.nhkso.or.jp
11月21日（火）19：00
東京 紀尾井ホール
S 7000円 A5000円
問合せ：Tel. 03-3289-9999
梶本音楽事務所
11月22日（水）19：00
イシハラホール
問合せ：イシハラホール
Tel. 06-6449-1276
曲目（11/21, 22）
ベートーベン
ピアノソナタ第9番ホ長調
ピアノソナタ第3番ハ長調
モーツァルト
ピアノソナタ第8番イ短調
ショパン
ピアノソナタ第3番ロ短調

■ダニエル・ビネリ（バンドネオン）とエドゥアルド・イサーク（ギター）

11月23日（祝）18:30
場所：Tribute to the Love Generation（東京 台場）
S6,500円　A5,500円
（当日は500円増し）
☞当協会員は、10%割引
問合せ：カンバセーション
03-3233-1819

■Tango y Punto（タンゴ・イ・プント）

12月6日（水）19：00
歌：香坂優
演奏：セステート・スール
踊り：ベロニカとマルティン
東京厚生年金会館大ホール
問合せ：Tel. 03-5701-5778
オフィス香坂優

■フアンホ・ドミンゲス・トリオ

12月9日(土) 17:00
東京　すみだトリフォニーホール
主催：ソティエ音楽工房
Tel. 3470-2727
S 5000円　A 4000円
B 3000円　Sペア 9000
☞当協会員は、10%割引
問合せ：Tel. 3470-2727
ソティエ音楽工房

■マルタ・アルヘリッチ

10月26日（木）
新潟市民芸術文化会館
10月27日〔金〕
栃木県総合文化センター
10月29日〔日〕
横浜みなとみらいホール
10月31日〔火〕
東京サントリー・ホール
詳細：梶本音楽事務所
03-3289-9999

日本アルゼンチン協会会報30号　2000年10月20日発行

発行人　野村秀治
編集長　河崎　勲
発行所　社団法人　日本アルゼンチン協会
105-0004　東京都港区新橋1-17-1　新幸ビル
電話：03-3501-4684　FAX：03-3595-3932
印刷所　株式会社　イデア・インスティテュート